



No.72 どこから来る信頼？ ムラ社会の安心感



(画像引用元: 日経XTECH)

ムラ社会で生きていると、お互い顔見知りなので、悪いことはできません。長いお付き合いだし変なことをすると住み慣れたところに住めなくなります。だからお互い信用できる！逆によそものは何をするかわかりません。信用できない人には近づかない…この感覚、多くの日本人が持っているような気がします。

海外に行っても日本人なら安心、ワクチンも国産ならOK、スーパーの食料品も地元産なら大丈夫…身内は悪いことをするわけがないというムラ社会の身内意識から信用しているけど、根拠はありません。

本来一人一人よそもの同士、知らない人と取引するには信用してもらうために相当のコストがかかります。役所がお墨付きをくれるのが一番安上がりですが、企業であれ中立的な認証機関であれ、言うことを信じてもらうには客観的なデータやその実地検証など多大の信頼確保努力が必要です。

例えばタクシー。知らない人の車に乗って行きたいところに連れて行ってもらうというのは、考えてみれば危険極まりない行為なのに大丈夫と思うのは、政府が監督しているからです。それが怪しければタクシーも危ない。まして白タクなどとんでもない！

逆に村の人のマイカーはこれほど安心できる移動手段はありません。ヒマな村人がマイカーで、行きたい時に行きたいところへ連れて行ってくれるのなら、ガソリン代どころかお礼を払ってでも使いたいものです。



谷口博文の政策イノベーション

Date :2021年06月29日

最新のデジタル技術は知らないもの同士の情報交換を圧倒的に速く安く便利にすることによって、瞬時にバーチャルのムラ社会を作ることができるようになりました。ログが記録されて悪いことをすれば証拠が残るので、悪いことはできません。この安心感のおかげでウーバー、滴滴、グラブなどのビジネスモデルが確立したわけです。

取引の信用にかかる膨大なコストがデジタル技術のおかげで大幅に引き下げられたのですが、日本は政府が税金を使って業者監督によって信用を維持しているので、その必要性をあまり感じないのでしょう。旧来のビジネスモデルを死守しこの新しいビジネスモデルを禁止しています。

デジタル技術や新ビジネスは発展途上で、それ自体の信頼性も議論されています。しかしながらと言ってそれが社会にもたらす新たな価値を否定するべきではありません。信用できないのならできるよう信頼性を高める努力をするべきであって、新しいものは信用できないと言って昔からのやり方しか信用しないとなると、日本の村社会は本当の意味で世界に取り残されてしまうでしょう。